

**頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム
—世界の成長と共存を目指す革新的生存基盤研究のための日本・アセアン協働強化—
報告書**

**生業活動と社会生活を通してみた東南アジア農村の変容と将来像
—カンボジアとその周辺国における研究—**

派遣者：小林 知

派遣期間：2014年12月24日～2015年3月26日

派遣先：王立プノンペン大学開発学科（カンボジア王国）、チュラロンコーン大学（タイ）

キーワード：安寧社会，農村の生業転換，カンボジア，国境域，紛争と技術移転

1. 研究課題について（400字程度）

東南アジアに暮らす人々の生活の今後の変化を，安寧社会というキーワードで考えてゆく。その際，特に，農村に生まれた人々の暮らしを検討する。人々の暮らしは，生命を維持する糧を得るための手段としての生業と，家族や親族とのつながりを中心とした社会生活から成っている。農村の生業は，伝統的には，狩猟・採集・漁労や耕作など，居住地の周辺の自然環境への働きかけを中心とし，世帯は季節変動などに即して複数の活動を行った。しかし，今日の農業は，外部から流入した技術や情報に影響を受け，刻一刻と変化している。また，都市化とグローバル化を背景として，今日の農村の人々の生業活動は農外活動に大きく依存するようになった。特に，都市へ，隣国へ，東南アジアの外へと，猛烈な勢いで範囲を広げる出稼ぎは，生業の一手段であるだけでなく，農村の人々の社会生活の変化にも大きな影響を与えている。過疎という日本の農村の深刻な問題も念頭に，21世紀の東南アジア農村社会の将来像を検討することが，本研究の課題である。

2. 派遣の内容（400字程度）

東南アジアでも，タイなどは，20世紀初頭から比較的安定した政治状況にあり，社会の近代化が漸進的に進んだ。一方で，カンボジアは，20世紀後半に度重なる戦禍を経験した。その社会が安定し，近代的な国家制度のもとで，インフラの整備や工業化が本格化したのは，ごく最近である。別言すれば，カンボジアの農村は今日，本研究が研究課題とする社会変容を，タイ農村部に比べて圧縮した形で経験しているともいえる。多大な経済的ポテンシャルをもつ地域として注目を集める東南アジアだが，内実としては，カンボジアの他，ラオス，ベトナム，ミャンマーなど旧社会主義圏の国々とタイとの間には，社会の経験に明らかな違いがある。グローバル化という社会変化の潮流を一枚岩的に語るのではなく，農村社会の変化という関心の下そのプロセスの多様性を検討し，地域レベルそして東南アジア全体での将来像を考えたい。

平成26年度は，12月25日から1月20日までの約一ヶ月をカンボジアで，1月21日から3月26日までの約二か月をタイで過ごした。カンボジアでは，派遣先の王立プノンペン大学開発学科に通い，同国の農村社会の変容に関して情報収集すると同時に，同学科の教員・学生と議論を行い，交流を深めた。同学科からは，Yin Soriya 講師と Nup Sothun 講師が同期間に京都大学東南アジア研究所に招聘されていた。この両名がカンボジアへ帰国する直前に京都へ戻り，両名の研究内容を含めて，東南アジア農村の今後の変容に関する共同研究を実施する準備を行った。

タイでは，バンコクのチュラロンコーン大学を派遣先とした。京都大学東南アジア研究所のバンコク

連絡事務所に駐在員として滞在することで、事務所が所有する研究スペース、コピー機、公用車などを優先的に利用し、バンコクおよびタイ国内の農村の変化に関する情報収集を進めることができた。

3. 派遣中の印象に残った経験や体験（800 字程度）

今回の派遣中は、カンボジア＝タイ国境付近に位置するバタンバン州およびポーサット州の農村地域を 2 度訪問した。その地域は、良質の土壌に恵まれ、商業的な農業開発の潜在性を秘めていたが、長らく紛争の地となり、1990 年代半ばまで定住村落が発達しなかった。ようやく 1990 年代末にクメール・ルージュ兵士が家族を連れて定住し、自然資源と土地を利用した開発が始まった。タイに隣接するという国境域の地政学的条件は、農業用の資材の供給や生産物の流通において、カンボジア国内の他地域よりも有利な状況をつくりだしていることは、訪問前から予想できた。

実際に訪問すると、農地の集約化と民間レベルの農業技術の移転が、興味深い形で進展している様子が明らかになった。前者は、カンボジア政府が 2012 年ころから力を入れる大学生を動員した農地測量キャンペーンを背景とする。その活動は今回訪問した国境域にも及んでいたが、地元住民の生業の安定には必ずしも結びついていなかった。つまり、訪問した地域の一部では、測量によって権利が法的に定まった農地が、大規模な農業開発をめざす外部の富裕者に次々と買われていく過程が確認できた。他方、農業技術の移転については、元クメール・ルージュ兵士が、紛争期の個人的な体験を通してタイ農村での作物栽培に関する情報を集め、それを実践する形で新たな活動（特に、ロンガンやオレンジなどの果樹栽培）を行っている様子が明らかとなった。農業知識や技術の伝達が、紛争経験という地域の歴史的動態に埋め込まれた形で進んでいる事実は、新たな発見であった。

一方、タイでは、移民労働者として暮らすカンボジアの人々の生活を垣間見ることができた。キャンプと呼ばれる雇用者が用意した労働者用の住居での暮らしを直接見たのは初めてであり、今日ますます増加しているカンボジアからタイへの越境労働者の生活の実態を調査する必要性を認識した。

4. 目的の達成度や反省点（400 字程度）

今回の派遣の目標は、平成 27 年度に予定する第二回目の派遣の準備であった。この意味で、国境域の地域レベルの歴史、カンボジア国内の政策、タイとの関係といった複数の要因を踏まえて、現在の地域のダイナミズムに触れ、考える機会を得たことは貴重であった。

派遣者は、1990 年代末から 2000 年代初めに、カンボジアの中央部の低地稲作農村で集約調査を行った経験をもつ。今後の派遣では、従来の経験を基礎としつつ、検討対象とする地域の時空間を拡張し、より包括的な視点から課題を追求することを目指したい。

5. 今後の派遣における課題と目標（400 字程度）

カンボジアでは今後、本プログラムでの派遣先である王立プノンペン大学開発学科に、王立農業大学、王立芸術大学などを加え、現地の教員・学生らと相互理解を深め、共同研究を対象地域に貢献する形で推進する必要がある。次の派遣では、研究課題の追求とともに、ネットワークづくりの面での成果を上げることが目標としたい。



写真 1 移植をまつキャッサバの苗（カンボジア、バタンバン州カムリエン、2015 年 2 月撮影）



写真 2 オレンジの果樹畑（カンボジア、ポーサット州ヴィアルヴェーン、2015 年 3 月撮影）



写真 3 果樹栽培について説明する元クメール・ルージュ兵士の村長（カンボジア、ポーサット州ヴィアルヴェーン、2015 年 3 月撮影）



写真 4 小農によるキャッサバ栽培（カンボジア、ポーサット州ヴィアルヴェーン、2015 年 3 月撮影）



写真 5 農地の開墾が大規模資本によって進められている（カンボジア、ボーサット州ヴィアルヴェーン、2015 年 3 月撮影）



写真 6 外国人労働者が住む「キャンプ」の様子（タイ、チョンブリー県、2015 年 2 月撮影）



写真 7 「キャンプ」に残っていたカンボジア人労働者（タイ、チョンブリー県、2015 年 2 月撮影）